

復興庁主催 第4回復興ノウハウ講演会「被災地域における“にぎわい”と“交流”づくり」
開催結果報告

第4回講演会の開催概要

第4回講演会では、『被災地域における“にぎわい”と“交流”づくり』というテーマを掲げ、被災地においていかに人・団体等の交流を生み出し、それをにぎわいの実現に繋げていくかについて考える回とした。事例に即して「にぎわい」の具体像をイメージできる内容とし、さらに、関係主体の協力・連携の経緯や方法にも光を当てた。

講師には、福島県大熊町を拠点とする、HITOkumalab（ひとくまらぼ）代表で米農家の佐藤亜紀氏、大熊町社会福祉協議会 副会長ほか多様な形で復興に関与してきた松永秀篤氏、出張バー・大熊 Bar mauve（バーモーヴ）店主の近藤佳穂氏のお三方をお招きし、個別講演と対談を通じ、“失敗を恐れず皆で盛り上がる精神”で復興に取り組み成果を上げている大熊町での実践についてリアルに語っていただくプログラムとした。

なお、佐藤氏は令和6年度復興庁「新しい東北」復興・創生の星顕彰の受賞者である。

(フライヤー)

第4回
復興ノウハウ
講演会
被災地域における
“にぎわい”と“交流”づくり
失敗を恐れず
皆で盛り上げる精神で
人口を動かしている町の
取組から学ぼう！

2025
12/11(木) 14:00▶15:30

全6回程度の講演会シリーズです。
会議の内容はオンラインで配信します。お申し込みを
される方には通って配信 URL を送信いたします。
(Zoom によるウェビナー配信を予定)

配信

事前登録制・参加費無料
全国どこからでも、どなたでもご参加いただけます。
※お申し込み後、下記 HP よりお申し込みください
<https://libertas.co.jp/departments/life-innovation/fukko-meeting/>

お申し込み締切 12/4(木) 17:00

主催：復興庁
事務局：株式会社リベルタスコンサルティング

佐藤亜紀氏
HITOkumalab 代表、
米農家 (遠平農園)
2014 年大熊町の復興支援員となり
町民のコミュニティ支援を担当。
避難指示解除後同時に移住し、
2022 年に HITOkumalab を開業。
地域のコーディネーターとして、
コミュニティ支援やイベント企画
運営、伝統芸能保存継承などに
関わる。

松永秀篤氏
大熊町社会福祉協議会
副会長
大熊町で生まれ育って 73 年。
縁あって会津若松市で暮らす
が、大熊町の避難指示解除と共に
帰郷。町の賑わい創出に向け、若
ながらの語りや伝統芸能の語り
起こし、季節の行事や路上の復活
に取り組み、次は何をやるか
を考えるのを楽しみとして
いる。

近藤佳穂氏
出張バー
大熊 Bar mauve 店主
大熊町の避難指示が一部解除され
た 2022 年に東京から移住。横浜
のホテルでの勤務経験を活かして、
双葉郡を中心に出張バーテンダー
活動を開始。2025 年 4 月に出産。
現在も様々なイベント出席を通じ
て地域の人々の交流の場作りを
している。

プログラム

14:00 開会
14:05 大熊でしか活きられない 松永秀篤氏
14:20 地域の文化はにぎわいづくりの手がかり 佐藤亜紀氏
14:35 カクテルでつなぐ地域の輪 近藤佳穂氏
14:50 ディスカッション 佐藤亜紀氏/松永秀篤氏/近藤佳穂氏
15:20 質疑応答
15:30 閉会

「復興ノウハウ講演会」について ※本年度は 6 回程度予定しています。

●本講演会は、被災各地の復興に向けた“教訓・ノウハウ”を、より実効的な形で、より多くの被災地や
関係団体等と共有する機会・場となることを目的としています。

●語り部団体や、東日本大震災被災地で地域課題の解決に取り組む団体が増った教訓・ノウハウを被災地
等を拠点に、全国の皆様にオンライン発信していきます。

第1回 【語り部育成講座】広報インストラクターに学ぶプレゼンテーションスキルアップ術
第2回 【語り部育成講座】震災を根拠で伝える
第3回 地域を動かす二つの力
＜公益性と事業性から学ぶ事業継続のヒント＞
第4回 被災地域における“にぎわい”と“交流”づくり ※講演会の動画は、後日公開予定です。

■日 時：令和 7 年 12 月 11 日 (木) 14:00～15:30

■講演者：佐藤亜紀氏 (HITOkumalab 代表、令和 6 年度復興庁「新しい東北」復興・創生の星顕彰受賞者)
松永秀篤氏 (大熊町社会福祉協議会 副会長)
近藤佳穂氏 (出張バー・大熊 Bar mauve 店主)

■対象者：高齢化、人口減少、市場縮小といった全国各地に共通する地域課題が顕著に発現しやすい被災地において、復興のゴールとして“にぎわい創出”に日ごろから取り組んでおられる個人・企業・団体や、それをサポートする立場にある行政や産業支援機関など

■参加費：無料

■当日次第：14:00 開会 (イントロダクション)

14:05 講演 (松永氏、佐藤氏、近藤氏それぞれから)

14:50 トークセッション (佐藤氏・松永氏・近藤氏、質疑応答の時間あり)

15:30 閉会

■実施形態：オンライン開催 (Zoom)

■登録者数：77 名 (事前申込ベース)

講演内容（講演実施順）

松永氏講演「大熊でしか生きられない」(概要) :

- ・ 20 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故により町は一変した。震災前は団結力があり絆の強い町柄だった。震災後は避難生活が始まり、全町避難が長期化した。
- ・ 自分も含めて被災町民が全国バラバラに避難し、誰がどこにいるのか不明で情報が届かない。諦めの気持ちもあった。
- ・ 復興に向けて、震災から 8 年後の 2019 年に大熊町に帰還した。震災前の人口にはまだ届かないものの、農業を再開したり、お祭りを復活させるといった動きが出てきた。
- ・ 復興へのスローガンは「絆づくりはにぎわいづくり」。おおくまコミュニティづくり実行委員会で、夏祭りや餅つきなどを実施し、絆づくりに力を入れている。
- ・ そのほか、自身は大熊町ひまわりプロジェクト、おおくままち 3.11 のつどい実行委員会、おおくま国際交流協会などに取り組んでいる。

佐藤氏講演「地域の文化はにぎわいづくりの手がかり」(概要) :

- ・ 自分は、福島第一原子力発電所から 7 キロの位置にある大熊町で、豊かな暮らしの実現に取り組んでいる。自分は町外からの移住者であり、移住の動機は福島第一原子力発電所事故に対する強い怒りであった。
- ・ 全町避難・帰還困難地域であったが、原発事故から 8 年後、一部地域で避難指示が解除になり、やっと町内で人が暮らせるようになった。これを受けて、もともと大熊町という地域にあった暮らしや文化等を、生きた形で後世に残していくこと目指ししている。米農家としての活動もその 1 つであり、地域の農業とそれに関連する伝統文化にとっても惹かれる。
- ・ 震災前、大熊町には「にぎわい」があった。各行政区で継承されていた盆踊りや四季折々の催しなどの伝統文化、農業（米作り）や果樹栽培（フルーツの香り漂うロマンの里）など様々なものが挙げられる。
- ・ 避難指示の一部解除後、町が交流拠点を整備し、そこを活用して様々な主体が様々なイベントを開催するのをサポートしている。拠点以外の場所（畑や個人宅などなど）での集まりも実施している。日常の営みの中から自然発生的に生まれたものが「にぎわい」となり、それが「コミュニティ」づくりにも効果を発揮すると感じている。
- ・ おおくまコミュニティづくり実行委員会（様々な催しを開催）、平馬会、熊川稚児鹿舞保存会、相馬流山踊り、おおくまふるさと塾など、町の歴史・文化を継承する取組が多いが、他方で Rainbow Music Club（近藤さんのバーイベントでのバンド演奏と音楽仲間の集い）、ふくしま浜街道トレイル（阿武隈山系の豊かな自然感じつつ町民らとの交流を楽しむ）等、取組は広がりを見せている。

近藤氏講演「カクテルでつなぐ地域の輪」(概要) :

- ・自分は佐藤さんと同様に移住者であり、結婚を機に大熊町へ移り住んだ。原発の廃炉作業を頑張る夫を支えたい、大熊町を拠点に復興の一翼を担えるかもしれないという思いがあった。
- ・モットーは「“何もない”は、実は何でもできる余白である」。横浜のホテル仕込みのカクテルを出張バーという形で、提供し、大熊町を中心に福島県双葉郡の様々な場所で提供し、にぎわい作りに貢献している。
- ・大熊町にある素材を使ったご当地カクテルも創作している。カクテル作りに様々なコンテンツを取り入れ、会話の材料を提供し、大熊町を知って頂くきっかけにしようとしている。出張バーはいつもと違う美味しいものや誰かに出会える場所である。旬や季節を大切にしてお人と人を繋ぐことを大切にしている。
- ・にぎわいや交流とは誰かが作るものではなく、一人ひとりの行動が重なって育まれるものだと考える。
- ・今後大切にしたいことは、余暇を皆で楽しめる町を目指すこと(誰かとちょっと話したくなるような時間の提供)、小さな出会いを積み重ねて人の輪を大きく広げていくこと、誰かの「楽しい」が別の誰かの「行ってみたい」や「また来たい」という循環に繋げること、など。
- ・「顔見知り」から「まちの仲間」へステップアップしやすい距離感を演出していきたい。ぜひ大熊町のイベントに遊びに来てください。イベント情報や大熊町での暮らしをSNSなどで発信中。

<松永秀篤氏ご講演の様様>



<佐藤亜紀氏ご講演の様様>

おおくま
コミュニティ
づくり
実行委員会



<近藤佳穂氏ご講演の様様>

気軽に交流ができる場所づくり

軽食・喫茶レインボーのマスターからの依頼



ご挨拶がきっかけでお手伝いをしていた、レインボーのマスターから『夜の活気を取り戻したい。うちでイベントをやらないか』

2023年5月より、おおくまーと内の店舗と外のテラス席にて
レインボータイムを開催。毎月最終水曜日の月イベントとして定例に

トークセッション内容（質疑応答を含む）

①活動継続の要因について

Q：活動を続ける上でのモチベーションの源は何ですか？

A（松永）：どんなイベントでも自分が一番楽しむこと。「楽しい」は他の人が言うのではなくて、自分が一番楽しい思いをしていれば、他の人も楽しいのかなと思う。

A（近藤）：全く同意見。私も自分が楽しいということを中心にやってきた。自分の友達が楽しんでくれる。そういうところがやっぱりモチベーションになる。

A（佐藤）：そうですね。私が活動を続ける上でのモチベーションの源は、楽しさもあるけれど、楽しさを追求していくことの大変さの先にある達成感だったりもする。

Q：活動を始めて、続ける過程で、どんな課題（人材、資金、場所、住民の理解など）に直面しましたか？

A（佐藤）：自分は「課題」を出すのが苦手で、果たして課題はあったかのかなと考えてしまいが、やはりうまく出てこない。どうでしょう、「課題は？」と尋ねられて、どういふものが思い浮かぶか。

A（松永）：最初は皆、興味本位で活動できるけれど、だんだん時間とともに慣れや飽きが生じる可能性はある。少しカンフル剤的なものが必要になるかもしれない。

A（近藤）：これまで本当に人に恵まれていて、ちょっと何か問題・課題があったとしてもすぐ解決してくれる仲間がいた。町の先輩方にしっかりお話を聞いて、仲間づくりをしてから何か行動に移していたので、ありがたいことに困ったことはなかった。活動資金や場所などは、知人が一緒に町長に面会してくれて、私も町長にご挨拶して、そんな所から物事が始まったり解決したりする。大熊町にはそういうところがある。

Q：形にするまでに多くの時間や人、お金が必要かと思えます。形になってから取り組み続けていくために必要なことはなんですか？

A（佐藤）：確かに時間や人、お金が必要と思う。形になってからさらに取組を続けていくために必要なことは何か。先ほどの松永さんの慣れとか飽きのことなど、続けることによって出てくる色々なことがあると思う。

A（近藤）：私は“根性”だと思って思う。私の取組である「レインボーバードタイム」は14回ぐらい、1年以上やった。皆が帰省していたりとか、全然お客さんが来ないこともある。日にちをずらずアイデアもあったが、これは固定でやっていく方が皆にとっては来やすいし覚えやすいと考え、そうした。あと、オペレーションに慣れていないから手が回らないこともあったりしたが、そういうことも全部根性で乗り切るといふか、回数を積み重ねるっていうことがどうしても大事だと思っている。

A（松永）：形にするまでといふか、イベントなどにしても考え過ぎてしまって一歩目を踏

み出せない。そういうことが最初はあった気がする。おそらくきちんと完璧にこうしたいということがあるから一歩目が出ないのだと思うが、やっているうちに「まあいいや」という感じで、完璧さを求めないような取組でいけば進むと思っている。

- A（佐藤）：なるほど。私も、どんどん変化させていくことが大事だって思った。同じことを同じような方向性で同じ人達でやるのは意外と良くなって、むしろ拡大させていく、変化させていく、新しい仲間に触れていくといったことが大事。それは根性と同じぐらい大事だなと思う。

②移住者を含む人的交流について

Q：地元の年配と地域外の若い人。地域間、世代間で交流を続ける秘訣は何ですか。

- A（松永）：人と人の付き合いだから大変というのはあるが、最近、「おひたし」ってキーワードを意識している。「お」は怒らない、「ひ」は否定しない、「た」は助け合う、「し」はしっかり聞く。これらを実行すれば、世代間で若者でも年寄りでもうまく互いに関わっていけるのかなって最近思っている。

- A（近藤）：周囲には本当に「おひたし」をして下さる年配の方々が多いと思う。若い人も生意気なことやらないように気をつけようとか、ちゃんと挨拶しようねとか物は返そうねとか。確かに当たり前のことだが、ちょっと世代間ギャップを生みやすいというか、町に新しく来た人などが「そういうことがあって大変だ」と受け取ることもあり得る。気をつけようねということをうまく伝える際に「おひたし」は有効。

- A（佐藤）：人間関係のことなので世代も地域も関係ない。常識的なところはしっかりやっ
ていこうという点は本当に大事だなと思いつつ、やはり「おひたし」のように根底にお互いをリスペクトするという意識を多くの人達が本当に常に持っている。これは凄くあるなと感じている。大熊町に来て初めて人のことを尊敬するっていう気持ちが解った、本当に。

Q：そもそも活動フィールドが異なるお三方が連携してきた経緯・必然性は何ですか？それがどういう効果を生みましたか？

- A（松永）：一言で言えば、私達3人とも大熊町が好きだから。やはり人は十人十色でそれぞれ気持ちは違うけれど、先ほどの「おひたし」のようにうまく付き合っていければいい。3人に共通することはやはり大熊町が好きで、仲間が好きだということかと思う。

- A（近藤）：私にとっては、佐藤さんが連携の縁を繋いでくれたと考えている。松永さん宅でダンスパーティーやるからおいでよと誘っていただき、初めて松永さん宅に遊びに行ったのも佐藤さんとの繋がりがきっかけだった。経緯という点では、イベントへの参加が大切なと思う。そして、必然性はやはり大熊町が好きで、町のために何かやりたいなと思っている人達だから集まりやすいとか、話が盛り上がるとか、そういうことがある。

A（佐藤）：私もやはり好きな人と好きな人を繋ぎたいという思いがすごく強い。町内で会った際のちょっとした会話からアイデアが生まれてきたりする。そういうふとしたタイミングをいっぱい増やしてあげることで、円滑にいくような気がする。

Q：地域外から訪問してくる人との関係の継続に向けて、どのような点を心掛けていますか。

A（佐藤）：町内に住んでない方との接点を大切にされている人はたくさんいらっしゃる。特に松永さん宅には町外からかなり色々な方々が来ている。

A（松永）：「この人がなんでウチに来ているのかな？」という人まで来ている。イベントについて言えば、町外の方をお客様扱いするのでなく、本当に“仲間”として迎えて、仕事を手伝ってもらう。そういうことをやってもらえれば、関係も良くなると実感している。

A（近藤）：私は、イマドキ過ぎるかもしれないけれど、インスタグラムで繋がることかなと思っている。どこに住んでいてもメッセージのやり取りがあり、相手の近況を知ることができるのが SNS の強みであり、特にインスタグラムはストーリー機能など、動画と写真と文章を組み合わせることができるのでリアルな情報を伝えることができる。遠くから来てくれて、1回交流会などでご飯を食べたことをインスタグラムで交換して、お互いの近況にちょっと反応し合ったりすると、大熊町のことを思い出してもらいきっかけになるはず。そういう発信を常に頑張っているのは、町外に住んでいる町民や、町に心を寄せてくださるネット上の方々など。どなたにでも色々町のことを知っていただけるように頑張っている。

A（佐藤）：私も、大熊町に興味を持ってくださっている方からご連絡をいただいたりしたときに心掛けているのは、自分だけで説明しようと思わないこと。必ず、この人とこの人にも会った方がいいですよっていう感じで、なるべくたくさんの町民らと接点を持って帰ってもらいたいなっていうことをすごく心掛けている。

Q：大熊町で子育てをして良かったこと、大変なことは何ですか。

A（近藤）：これについては色々ある。良かったことは、保健師さんや町役場との距離が凄く近いので、困ったことがあればすぐ相談できる環境がある。逆に大変なことは医療機関が少ないということ。今後病院の整備があるようなので少し安心になっていくかと思う。あと、新たにスーパーマーケットがオープンするので、子どもの離乳食が欲しいなとか、食べさせてみたいなと思った時に行動できるようになるのは嬉しい。また、生協など定期的に宅配をしてくれるサービスがあり、赤ちゃんがいると配達料が安価になるのは凄く良い。それで離乳食の素材を集めたり、自分の食事の時短でできるようなお料理セットなどを購入している。それから、良かったこととして、人口が少ない町なのに意外と町の皆さんに子どもを可愛がって育ててもらえること。それと施設のキッズスペースが空いていて使い易いこと。つまり立ちや寝返りの練習もさせ易い。

A：(佐藤)：町に子供がいるのが凄く嬉しい。避難指示解除の後は全然子供いなかったから。本当に涙が出てくるほど嬉しい。

③地域間連携について

Q：他の地域との連携はありますか。どのような連携が有効だと思いますか。

A（松永）：大熊町が一番だと思っているから、実はあまり考えたことがなかった。だから言えるとしたら、大熊町においでっていうこと。もし連携して何かやっという場合は、何をめざすかという目的の共有ができれば、仲良くできるかな。

A（近藤）：連携はある。まちづくり会社の集まりである「ふたばエイト（双葉郡まちづくり協議会）」が連携例の1つ。これは月に1回ぐらい、いま町がこんな状況でこんなことに取り組むつもりですといった情報を交換している。私もふたばエイトの集まりでいわゆる“熊女”（くまじょ）の1人として、また女性として、どういう住み方、どんな暮らしをしているかという話をしたことがある。それから、浪江町の十日市や大熊町のふるさと祭り、富岡のえびす講市といった同種のイベントを運営している人たちが情報交換して、例えば警備や物品調達といった運営面の課題などについて話し合う場があったら良いと思う。意外とプライベートで飲み会をしている人達もいるので、そこを補完・強化していく。

A（佐藤）：私は「ふくしま浜街道トレイル」を推進しているが、これは地域間の連携がないとすごく運営が難しくなってくるものなので、皆で意識を揃えて、「この道を大事にしていこう」という点は、これからチャレンジというか、もっとやっっていかなければいけないと感じている。

④活動を通じた成果実現や目指すゴールについて

Q：活動を通じ町の雰囲気や人々の変化を感じる瞬間はありますか。どんな変化を感じますか。

A（佐藤）：2019年の一部地域の避難指示解除のときは人が少なかったが、2022年の町内の避難指示の解除という大きな変化があったので、単純に住む場所が増えたこともあり、活動を通じた街の雰囲気の変化とうまくリンクした。活動結果だけではなく町が変化しているので、活動も変化しているという2つの変化があった。

A（近藤）：私は具体的な変化を感じたことがあって、バータイムで全然知り合いでなかった人達が顔見知りになり、定例的に集まってくれるようになった。私の活動がきっかけで知り合いになった。大熊町は赴任など来ている方が多いと思うが、同じ会社ではない人などと話すことは面白いなと思ってくれたのかなと思う。そういう変化が住んでいて楽しいっていう気持ちを生み出すと考える。

A（松永）：知らない人同士が自然と話し合えるという変化が見られた。私は大熊町で生まれ育って、外にあまり行かない人間だったが、都会から若い人が来て自分の視点も徐々

に変わってきて、若者視点になってきたのかなってというような感じがする。会話の中でも笑顔が増えてきた。

Q：移住者を増やすため、既に移住した方（先輩移住者）が行っていることはありますか？

A（佐藤）：私自身は、移住者を増やすためというよりは避難先からの帰還の方も凄く増やしたいなと思っている。現在違う場所に住んでらっしゃる町民と、既に移住して町に来られた移住者が、その方達にとっていいこととか、来たいなと思えることとして行っていることはありますかという質問と理解している。

A（松永）：これは、それこそ先ほど近藤さんが言っていた情報発信が大事であろうと考える。

A（近藤）：私もいわば「先輩移住者」かもしれないが、私の周りの方がやっているのは交流イベントである。お店を貸し切って、この日に移住希望の方が見学に来るのでご飯を一緒に食べようというふうに言って、ワイワイと楽しい夜を過ごすことが結構多い。

Q：今後、どのような取組やイベントを計画していますか。

A（松永）：ここ「浜通り」地域には海に面している町村があるが、大熊町だけ海に出入りすることができない。その海に行って地引き網をやりたいな、魚獲りをやりたいな、例えばそういったアイデアを佐藤さんと温めている。

A（近藤）：私は月並みだが、出張バーに今後も取り組んでいく。今度、公営住宅の皆さんらとクリスマスパーティーで出張バーをやる。キッチンがしっかりある場所だとフレッシュなフルーツなどの素材を使えるので、例えば大熊町のキウイを使ったカクテルを出す予定である。町民の方ならどなたでもお越しいただける。

A（佐藤）：私も、先ほど松永さんが言ったように海を活用した、つまりは“大熊町の海を取り戻す”というところを一生懸命やりたいのと、山も取り戻したいので、“海開き・山開き”をぜひやりたいなと思う。

Q：復興のゴールはそれぞれ何だと思えますか？ 抽象的ではなく、数字を入れた形で聞きたいです。例えば、町から市にするために町民数 10 万人にすることとか、より具体的なビジョンが聞きたいです。

A（松永）：果たして復興のゴールってあるのだろうかというのが自分には疑問だった。インフラ整備、地域文化や生業（なりわい）の再生とか、「整備」、「再生」とよく言われるけれど、自分の中では、復興の最終目標とは「外部からの支援に頼らないで自分の力で未来を語れる、作れる」こと。そういう状態になれば、それが復興かなと思っている。

A（近藤）：ちょっとの間しか大熊町に住んでない私が復興のゴールについて語るのは難しいが、自分なりに考えてみると、私は町内に元々あったお菓子屋さんやお花屋さん、飲

み屋さんなど、暮らしを豊かにしてくれるようなお店が1軒以上戻ってきてくれたら嬉しい。やはり母になった今の想いとしては、子どもたちに誕生日にはケーキをあげたいとか色々なことを思うようになったので、そういう暮らしを豊かにする店がまずできることで、それが自走できるぐらいの人口になることが大事だと考える。数字を調べてみたら、人口が大体5,000人以上になることが、商店が自走できる商圈規模であるらしい。大熊町は2034年に人口4,000人を目指している。いまは震災前とは違う暮らしをしているので、ゆくゆく5,000人以上になって、震災前と同等かそれ以上の“町のつくり”になっていくのが良いと思っている。

- A (佐藤) : 私も、「ゴール」と言うと途方もないというか、言葉の意味自体が難しいと思うが、敢えて本当に目指したいものを自分の中で考えてみると、「皆に町に帰ってきて欲しい」ということと、「農地を全部使っている状態にしたい」ということは目指したいところである。目指すということと、達成する・しないということは別の話かもしれないが、私自身はこれらを目指してこれからも大熊町で生活していきたい。

<トークセッションの様様>



質疑応答

Q 活動を通じ町の雰囲気や人々の変化を感じる瞬間はありますか。どんな変化を感じますか。

おわりに

佐藤 : 最後に、私から本日オンライン参加して下さっている皆さまにご挨拶させていただきます。今回、このような機会をいただきまして本当にありがとうございました。こんなにじっくりとお互いに、復興に向けた活動について深掘りしてお話する機会というのは、この復興ノウハウ講演会がなければなかなか得られなかったもので、私達にとってす

ごく有意義な時間となりました。皆さまにとっても少しでもお役に立つような知見を提供することができたなら幸いです。これからも大熊町を応援していただければと思いますし、やはり是非わが町に来ていただきたいので、私たちに会ってください。

当日資料

- ・ 松永氏講演資料
- ・ 佐藤氏講演資料
- ・ 近藤氏講演資料

お問い合わせ先

復興ノウハウ講演会開催事務局（株式会社リベルタス・コンサルティング）

Mail: fukko-meeting@libertas.co.jp

Tel: 03-3511-2161

（以上）